

日本語教育と私

—— 出会った教科書・作った教科書 ——

岡 野 喜美子

1. 日本語教育との出会い

私と日本語教育との出会いは1960年にさかのぼる。その時までの私は「外国語としての日本語」について何の認識をもったこともなく、ましてや「日本語学」「日本語教育」という分野のあることすら知らなかった。国文学出身の者として「国語」「国語学」「国文法」「国語教育」などについての認識と知識、「国語の教育実習」の経験があるだけであった。そのころ、国際基督教大学ではすでに「日本語教授法」のような、日本語教師になるための養成講座が設けられていたと思われるが、私はその存在を知らなかった。当時は今のような、情報が自然と耳に入ってくる時代ではなかった。こうして、私の日本語教育は、日本語教師としての訓練も知識もないままに始まったのである。しかし、それだけに鮮烈な出会いでもあった。ちなみに、日本語教育学会が設立されたのはそれから2年後の1962年のことであり、他国は知らないがアメリカでは大学教育のマスプロ化がすすみ、日本語学習者が飛躍的に増えてきた第1期の日本語教育拡大時代でもあった。

私が日本語教育を始めて、最初に出会った教材は、だれが作ったかわからないプリント教材で、挨拶語やいかにもサバイバル・ジャパニーズといった類いの表現が並んでいた。私は自分が受けた英会話学校の授業での、ミシガン・メソッドとして有名であった教授法を思い出しながら、手探りで教え出したものである。それからまもなく、アメリカ人言語学者によるワークショップに出席し、ドリルをいかに効率的に素早く行うか、コントロールされた語彙と文型で成り立つ授業をいかにうまく運ぶかを学び、フランス語のデモンストレーショ

ン・クラスに参加してその教授法を体験することができた。これはまさにオーディオ・リングル・メソッドそのものであった。

2 日本語文法との出会い

その後、1962年に、私はアメリカの大学の日本分校に採用され、日本語を教えることになった。その時、教科書として手渡されたのが Samuel E. Martin の『ESSENTIAL JAPANESE』であった。副題として An Introduction to the Standard Colloquial Language とあるこの本は、1954年初版で1962年当時までに2度の改訂を経て12版ぐらいを重ねているところを見ると、かなり広く使われていたことがわかる。現在も出版社のリストに書名が載っている超ロングセラー書である。

この書は、初版の INTRODUCTION に日本人のチューターを使って学習するようにと書かれていることや日本にある出版社から出版されていることから見ても、初め、日本に多くいたアメリカ人、英語圏の個人学習者を対象に作成されたものが、次第に評判を得てアメリカの大学の日本語教育で使われるようになったもののようである。解説はもちろん英語で書かれ、日本語文はすべてローマ字表記である。

この『ESSENTIAL JAPANESE』という書は日本語学習書、日本語教科書であると同時に、私のような日本語教育を志す者には日本語文法指導書の趣があった。私にとって、「外国語としての日本語」に目覚める画期的な書であった。日本語教師としての正式の教育、訓練を受けていなかった私自身にとっては、これは、国語とは違う「日本語」、国文法とは違う「日本語文法」、そして、日本語の何が英語話者にとって問題になるのかを学習するのに絶好の書であった。また、それまで受けてきた国語教育の中ではほとんど意識化されたことのなかった「口語文法」への導入の書でもあった。特に、品詞分類は、国文法とは違う切り口からなされており、「目からウロコ」のような感覚で当時はそのまま受け入れたものであった。たとえば、「話して」を国文法では「話す」の連用形「話し」に接続助詞「て」がついたものとするが、この本では、「話して」を gerund (動名詞) という form、つまり活用形の一つとしてとらえるのである。このように英文法に引きつけて分類したもののほか、国文法で

は助動詞である「だ・です」を論理学・英文法に拠って copula として独立させているなど、日本語を英語との対比において外国語として見ることに触れ、私は日本語構文の分析、分類の面白さに熱中したものである。こうして、外国人に日本語を教える教育現場での楽しさと同時に、国語から離れての新鮮な日本語の発見、日本語ということばの面白さをこの本によって味わいはじめた。INTRODUCTION に、“The structural analysis on which the present work rests is primarily the work of Professor Bernard Bloch of Yale University.” とあるように、Bloch の構造主義の流れを汲んだ日本語分析にもとづく文法体系は、私にとってその後の日本語を見る目の原点ともなった。さらに、この本は口語の本とうたっているだけに、アクセントや縮約形、否定疑問文への答え方、などといった項目の取り上げ方で話し言葉の特色を扱っており、興味をそらされた。

その後、学生にとってはあまりに文法書という趣が強かったためか、文字学習のないこともあってか、この本は使用されなくなり、代わって長沼の『標準日本語読本』の初級レベルを短期間使った。ローマ字だけではない日本語教科書の使用を試みたものであったが、『ESSENTIAL JAPANESE』使用のあとでは、特に文法分析の面白さを感じることはなかった。また、話し言葉なのか書き言葉なのか不明な、古さを感じる日本語文が並んでいて、若い大学生には不向きと感じた。さらに、こういうタイプの教科書で教える教授法を知らない私には、教えるうえでの焦点も定まらず、捕らえどころがなかったのを覚えている。

そうこうするうち、1962、3年ごろになって、出版されて間もない Eleanora Harz Jorden の『Beginning Japanese』を手にするようになった。そのころ、留学生ではない英語圏の一般大学生向けに適した日本語教科書を探していた最中であったため、この本に出会った時には、教科書として採用するかどうかを検討したものである。この本については、文法分析や会話分析の面、会話の流れの面などで、当時非常に優れた口語日本語の教科書であるとの印象をもった。1960年前後、アメリカを席卷したオーディオ・リンガル・メソッドの典型のような教科書であった。しかし、この教科書はもともと外交官養成のために書かれたもののようで普通の大学生向けとしては丁寧すぎる表現が多いこと、

学習に時間がかかりそうであること、ローマ字だけの2技能型の教科書であるため文字の学習はどうするのかという問題があることなどを考え、結局採用に至らなかった。

こうして、よりコンパクトでカリキュラム上も学習可能であり、読み書きの入った4技能型の大学生向け日本語教科書を作る必要があるとの判断から、教科書編纂に着手することになった。

3 初めての日本語教科書編纂

1962年ごろ、専任となった私は上司の言語学者とともに教科書の作成を始めたが、今までにない教科書を作りたいという気持ちが強かった。まず、文型の選定、「易から難へ」という文型の導入順序、文法用語の確定、文型の型の見せ方、文法の解説の仕方など、構文にかかわることについて方針を定め、その後、どのような会話場面が適当であるかを検討した。当時は、もちろんアメリカではオーディオ・リンガル・メソッドの時代であったため、基本的にはこのメソッドにのっとりながらも、ひらがな、漢字などをどう導入していくか、ローマ字をどの程度入れるかについても工夫が必要であった。(現在でもアメリカにおける初級日本語教育では、文字教育、読み書き教育軽視の傾向が見られる。) その時代、アメリカ型の教科書としては、ローマ字表記のものばかりであり、4技能をうまく扱った教科書ができれば非常に特色ある総合的な教科書ができると考えた。

文型の選定には国立国語研究所の『現代語の助詞・助動詞—用法と実例—』が大いに役立った。この書は国語学にもとづいて意味分類がなされており、そのまま日本語教育に結びつけられるというものではなかった。しかし、それ以前に培われた日本語を外国語として見る視点があったため、初級的なもの、口語的なものの選別は困難ではなかった。なるべく『BEGINNING JAPANESE』のような先行する教科書の影響は受けないようにしていた。

ただ、オーディオ・リンガル・メソッドによる教科書としては、アクセントやイントネーションを示す必要があると考えた。結果、アクセントについては、私は『明解日本語アクセント辞典』で東京アクセントの法則を学び、会話のアクセント表記の参考とした。日本語の教師には標準アクセント、正しい発

音が要求された時代である。

1963年にできた最初の教科書は『LEARN JAPANESE-Pattern Approach』と
いった。品詞の分類法、品詞の名称、文型の配列に独自の工夫をこらし、文型
の導入順序に忠実に会話を書こうとして苦労したものであるが、今から思えば
文型に捕らわれていた時代の教科書という限界もあり、私自身の会話を書く力
の足りなさもあった。その後、一般大学生の日本語学習者がさらに増えてきた
こともあり、この総合型の教科書へのニーズに応えるためにも、改訂して広く
世に問おうということになった。そして、1967年には大きく書き直しや書き足
しをして大改訂を行い、『LEARN JAPANESE-College Text』として刊行した。
アメリカのメジャーな大学では『BEGINNING JAPANESE』が、マイナーな大
学では『LEARN JAPANESE』が使われるという構図がしばらく続いたよう
である。

4 いくつかの初級教科書との出会い

1966年から、私は早稲田大学の非常勤の講師ともなり、初級、中級日本語教
育に従事した。そこは、日本語研究教育センターの前身である語学教育研究所
(語研)の一部門、日本語教室という所であった。中級を教えたのはこの時が
初めてであったが、漢字系学生にたいする中級日本語教育は教えやすかったの
を覚えている。ここの初級日本語教育で使用した教科書は、1967年に刊行され
た『外国学生用日本語教科書 初級』であった。それ以前には試用版として使
われていたものである。さまざまな国からの留学生を対象とするため媒介語も
なく、文法解説書もなく、直接法(とおぼしき方法)で教える初級日本語教育
は私にとって新しい体験であり、毎日が手探りであった。

1968年からは、国際部でも兼担で教えることになった。当時、国際部はアメ
リカ人留学生ばかりであり、私が担当することになったのはまったくの初心者
のためのクラスであった。その際、自著を使用するように言われ、『LEARN
JAPANESE-College Text』を使った。熟知している教科書であること、カリ
キュラム上の学習時間がほぼ合っていること、オーディオ・リンガル・メソッ
ドで教えられるということなどで、教案も作りやすく教えやすかった。学生
の中には非常に習得度の高い学生が何人か出た。

その後は、早稲田大学の教科書を使うという方針で、国際部でも『外国学生用日本語教科書 初級』使用の期間がたしか1989年ごろまで続く。この教科書は基本的に漢字圏の学生を対象に編纂された教科書であるためか、初級であっても学習漢字が700を超え、語彙数も非常に多く、中級への移行を強く意識した、あるいは途中から中級に入っている本といえた。最初のころは、英語による文法解説がなく、学生たちから出ていた要求に応える形で、途中で解説書ができて助かったのを覚えている。しかし、この教科書が国際部の初級日本語教育に適していたかという点、いくつかの課題を抱えていた。まず、実際の授業時間数に合わせるため、語彙も漢字も本文も相当削ぎ落としながら教えなければならなかった。また、学生たちから口頭表現学習への要望が高まっていたが、この教科書ではそういうコミュニケーション指向に応えることができなかった。会話や本文の内容も学生の関心と離れていた。そういう中で、どういういきさつからか、初心者向けのクラスで、水谷の『An Introduction to Modern Japanese』が、数年間だけであったが、使用された。出版されて間もないこの教科書の特色はその会話にあった。構文に捕らわれない自然さがあり、たしかに学生たちの会話指向を満足させることができた。しかし、一方で、簡単すぎる文法解説しかなく、それもシステマティックでないため文法教育が疎かになるきらいがあった。大学での日本語教科書というより、一般人向けの学習書のようにもあった。また、語彙も少なく、漢字や文、文章の読み書きがほとんどないため、結果的に文法解説、文法練習問題、漢字表、漢字練習問題、読み物などの作成、語彙の補充といった仕事が私たち教師を待っていた。会話力の育成に関してはかなりよい面もあったが、どう中級につなげていくのかという点でも、4技能の習得という点でも、足りないものがあった。

以上のほかに、私が1978年から79年にかけて教えることになったオックスフォード大学では、Anthony Alfonso の『JAPANESE LANGUAGE PATTERNS』を使うよう要請された。目的は、信じられないことだが、口頭表現練習にあった。テープはあるものの、この文法学習書で口頭表現練習をすることには無理があり、学生たちからもこの本は忌避され、使用は頓挫してしまった。

5 教科書の改訂と教材作成

1980年を過ぎたころ、前に作成した『LEARN JAPANESE-College Text』をより時代に合ったものにするよう出版社から求められた。そこで、大々的に改訂し、1984年から1985年にかけて『LEARN JAPANESE-New College Text』として出版した。本文の会話やその場面、ドリル、練習項目、解説の書き換えと追加などを行って、ページ数も増え大部なものとなった。これはまた、当時アメリカで謳われていた Culture Based Approach の理論に拠って日本語学習を通じて「日本文化」を教えるという方向をも目指して、文化に関する解説を新たに加えたことにもよる。敬語や待遇を文法や文型として教えるだけでなく、その背景の解説をしたり日本事情の情報を盛り込んだりしたものである。実は、この改訂にあたっては、共著者の言語学者から、ノーショナル・ファンクショナル・シラバスの教科書にもっていけないか、という提案も受けていた。当時の私にはノーショナル・ファンクショナル・シラバスというものが十分理解できていなかったこともあり、さらに適当な資料も実例も手元になく、具体的なイメージを抱くことができなかった。今から考えれば、もし私がこれを十分理解していたとしても、もともと基本的にはオーディオ・リングル・メソッドで成り立っていた教科書をそのように変えることには無理があったであろう。しかし、せめてもの努力としてシチュエーショナルな会話を増やしたり、より役に立ちそうな自然な会話になるよう書き直したりしたものである。この本は著者である私は使用したことがないが、アメリカでは現在も使われているようである。1963年の最初の教科書から見ると、それなりに非常に進化を遂げてきたものであるが、いわゆる「機械的ドリル」として批判された Substitution Drill のようなドリルも多数あり、時代を感じざるをえない。

このあと、教科書ではないが、1988年から91年にわたり、私は『日本語運用力養成問題集』という3分冊の問題集作成に従事した。これは、単なる構文や文法学習のための問題集ではなく、短い応答の中からも文脈を理解して初めて答えられるという、まさに運用力を試し運用力を養っていこうという意図のもとに作られた問題集で、複数の共著者とともに切磋琢磨して練り上げたものである。この仕事を通じて経験したことは、共著者たちとの話し合いや共同作業、文作りや対話・会話作りの大変さと楽しさであり、発話の意図や談話をめ

ぐって語用論を実践に移しているかのような面白さであった。これは、私にとって自然な流れの応答や会話、いい文や文章を書くための鍛錬の場となり、この後で作成した日本語教科書の主会話や Response Practice や Discourse Practice、練習問題などの作成にとって必要、かついい経験となった。

6 国際部における初級教科書編纂

1989年、私は日本語研究教育センターの専任に任ぜられ、国際部担当のコーディネーターとなった。そのころまでに、すでに、国際部の留学生のニーズに合った教科書を望む声が学生からも教師の間からも国際部上層部からも強く聞かれるようになっていた。こうして、1990年ごろ、4人の非常勤講師とともに国際部からの要請を受けて教科書作成にとりかかった。そうして、試用版を経て、1994年には『TOTAL JAPANESE』シリーズの本冊4冊（「Conversation Book」1, 2、「Reading and Writing Book」、「Grammar and Conversation Notes Book」）を、2000年には「Workbook」1, 2、「教師用指導書」（授業用タスク・練習シート・絵教材入り）を刊行した。

国際部の学生のニーズとは何か。初級の学生たちに限って言えば、最もはっきり意識されるニーズとしては日本人とのコミュニケーションが円滑にできるようになることである。何年も前から聞かれた「会話を学びたい」という声はこのことを指している。一方で、学生たちにあまり意識されていないが大切なものとしては、上のレベル、つまり、中級や上級レベルにつながる初級日本語教育へのニーズがある。これは、以前に比べて、上のレベルでの日本語学習を指向する学生が増えてきたことと関係がある。しかし、現に、初級における文法力習得に興味がない学生もいるし、漢字学習や読み書きを苦手として敬遠しがちな学生がいるのも事実である。こうした学生に、教師は引きずられてはならない。初級でコミュニケーション力のみをつけることをしていたのでは、中級・上級での読み書き学習に困難を生じるだけでなく、語彙力や表現力の面で中級以上での口頭表現力の習得も危うくなることを知らせなければならない。

残念ながら、母国で初級日本語教育を受けてきた学生に見られる大きな傾向として、2技能のみで4技能をバランスよく学習できていないこと、基礎文法の力がないことの2点がある。これらの学生は何かの技能や能力が欠落して

いるため、中級に入っても力が伸びず苦勞したり、数年間日本語を学習したにもかかわらず、初級レベルの学習を繰り返さなければならなかったりすることになる。また、それなりに話せるが、待遇やスピーチ・レベル、話し言葉と書き言葉の区別などにまったく無頓着なため、子供っぽさから抜けられない学生も往々にして見られる。

こういう「少し日本語ができる」学生に、どのような初級日本語教育を行ったらいいのか。どういう初級教科書を作ればいいのか。それが問題であった。

この時期は、コミュニケーション・アプローチが日本語教育の中にも取入れられたところで、1987年ごろからはロールプレイ、タスク、プロジェクト・ワーク、ゲームなどの教材、指南書が次々と刊行されていた。楽しい練習、意味ある練習が謳われるようになってきていた。1988年には、中級ではあるが、機能重視の教科書も名古屋大学から出版されていた。

私たちが教科書編纂中の1991年には、筑波大学から『SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE』が出版された。これは、コミュニケーション力と文法力をともに学習させようとする2技能型の教科書であり、初めてコミュニケーション・アプローチを取り入れた初級教科書であった。

ところで、私たち著者は、『TOTAL JAPANESE』を編纂するうえで、次の点を確認し合った。

- 1 初級から4技能をバランスよく育てないと、中級につながらない（総合型教科書の必要）
→読み書きをできるだけ会話や文法の学習と結び付ける
- 2 初級の基礎文法力がないと、中級以上の日本語教育がうまくいかない（accuracy の獲得の必要）
→文型の提示順序はできるだけ「易から難へ」にして学習しやすくする
- 3 コミュニケーション力をつけたいという学生のニーズに応える（fluency の獲得の必要）
→語彙や文型、表現はコミュニケーションに必要なものを重視し、談話や機能に結び付ける

これら3項目を理念として念頭におき、初級の「会話の本」としては「基礎語彙と基本文型を積み上げ式に学習する一方、場面性や機能も重視してコミュ

ニケーション力を養成する」という折衷型の教科書を作ることを目指した。また、それをできるだけ「読み書きの本」と結び付けながら、話し言葉と書き言葉の違いを認識させるようにした。話し言葉の中では、スピーチ・レベルを中心とする待遇表現の学習もできるようにした。教え方としても、上の理念にもとづき、コミュニカティブ・アプローチのよいところも取り入れたタスクや練習も行うが、活用形や基本文型など基本文法については、従来型の、繰り返して覚える、書いて覚える方式の練習も取り入れた折衷法が行われることを想定した。

現在、国際部日本語教育の実質授業時間は年間240時間弱である。『TOTAL JAPANESE』の内容の濃さからすると、まったくの初心者がこの教科書のすべての課を学習するには無理がある。少ない学習時間で初心者に教えるための教科書としては、別のタイプのものが考えられるのかもしれない。しかし、一方、初級を多少とも学習してきた学生には、この総合型の初級教科書が適していると思われる。この教科書の目指すところに従い、よいところは活用し、不足するところは補いながら、今後も使われていくことを著者の一人として願っている。

私はこれまで、教科書を作る機会に何回か恵まれた。私にとって、日本語教科書は、出会うことにより日本語および日本語教育に開眼させてくれたものであり、使うことにより、作ることにより日本語教師としての自分を鍛えてくれたものであった。感謝している。